

経験と振り返りを蓄積・昇華する 進路教育で、生徒一人ひとりの “使命”の発見と実現を支援する

みその

● 聖園女学院中学校・高校 (神奈川・私立)

取材・文／笹原風花



左から、進路指導部渡邊優香先生、進路指導部部長(前任)鴨志田昌子先生、進路指導部部長(現任)伊藤直紀先生。

「一人ひとりの進路を大切に。言葉にすると当たり前なのですが、これを進路指導の根幹に置いています」と進路指導部部長(取材時)の鴨志田先生。「踏み出す人に」という教育目標には、自分

6年間を通して自分はどう
なりたいたのかを深めていく

「一人ひとりの進路を大切に。言葉にすると当たり前なのですが、これを進路指導の根幹に置いています」と進路指導部部長(取材時)の鴨志田先生。「踏み出す人に」という教育目標には、自分

「一人ひとりの進路を大切に。言葉にすると当たり前なのですが、これを進路指導の根幹に置いています」と進路指導部部長(取材時)の鴨志田先生。「踏み出す人に」という教育目標には、自分

「一人ひとりの進路を大切に。言葉にすると当たり前なのですが、これを進路指導の根幹に置いています」と進路指導部部長(取材時)の鴨志田先生。「踏み出す人に」という教育目標には、自分



2年次には、SDGsをテーマにグループで課題探究に取り組む。写真は発表会の様子。Zoomを使って各教室に配信し、視聴した生徒らが採点を行った。

学1年次は自己理解、2年次は他者理解・他者との協働、社会とのつながり、3年次は進路や将来のキャリア。さらに、高校1年次にはどのような職業・進路や大学・学問分野があるのかをより具体的に探究し、2年次にはそのなかから自分の歩むべき道を見つけ出していく。そして3年次は、自分が定めた目標や夢の実

進路指導の課題とテーマ

1946年に「聖心の布教姉妹会」により設立された聖園女学院中学校・高校。カトリック精神に基づく教育を理念とし、生徒が人間としての生き方を学び、一人ひとりが自分の使命を自覚して成長することを目指している。神奈川県藤沢市の高台に位置する校舎は豊かな緑に囲まれ、聖堂やマリア像などが醸し出す趣はカトリック校ならではの。校訓は「信念・精励・温順」。「踏み出す人に」を教育目標に掲げ、そのために必要な「見つける力・磨く力・認め合う力」の3つの力を養うことを軸に、教科指導をはじめさまざまな活動や取組を展開している。2016年には学校法人南山学園の一員となり、南山大学との提携も進んでいる。

進路指導においても「人には一人ひとりに使命がある」という考えに基づき、生徒が学校生活を通して自分の使命を見出し、社会に巣立っていくための基礎を育てることを主旨としている。ほぼ全員が進学を希望するなか、進路指導部では6年間の一貫教育を通して身につけてほしい力を段階的に提示し、学年を経るごとにステップアップできるようテーマを設定。生徒一人ひとりが自らの手で進路を選択していけるようサポートしている。一方、女子校という特性もあり、保護者が子どもの進路に対して強い希望をもっているケースも。生徒自身の希望との調整や進学先とのミスマッチ防止にも注力している。

● 進路状況(2021年3月実績)

大学進学79人、短大進学4人、
専門学校進学3人、
その他(受験準備・留学など)7人

毎年ほぼ全員が進学を希望。首都圏の私立大を中心に、国公立大にも進学している。指定校推薦枠や南山大学への学内推薦枠も多い。

● School Data

1946年創立／普通科／生徒数243人 ※高校のみの人数

現に向けて邁進する。学年ごとのテーマに応じて、助産師による講話や体験プログラムからなる「愛といのちの研修」やSDGsに関する社会課題をテーマにした探究活動などの学校独自の取組のほか、外部企業と連携した企業インターンシップや探究プログラム、コミュニケーション研修、チームプロジェクトワーク、大学・学問の学内説明会などを実施。生徒は実践と振り返りを繰り返しながら、「自分はどうなりたいのか。そのためにはどうしたらいいのか」という大きな問いに向かつて思考を深め、その履歴をeポートフォリオに蓄積していく。

進路の実現に不可欠な自己管理能力を養う「聖園ノート」

一方、進路の実現に不可欠な自己管理能力を養うために採用しているのが、学校オリジナルの手帳「聖園ノート」だ。5年ほど前から、中1から高3まで全員に毎年1冊ずつ配布している。見開きが週単位になっており、毎日の学習や生活のスケジュールに加えて「振り返り」が書き込めるようになっているのが特徴だ。

「最初に使い方を指導して習慣化させることが肝心なので、中学1年次は教員への提出を必須にし、教員もコメントを返すなど丁寧に指導しています。導入当初はスケジュールの部分が学校にいる時間帯だけだったのですが、その後、24時間に拡張しました。これにより教員は生徒の学校外での生活や学習の状況を把握できるようになり、生徒にも私生活でも

ちゃんと自己管理をしないといけない！という自覚が芽生えたようです」（鴨志田先生）

また、ノートには定期テストや模擬試験の結果や振り返りを記録するための別冊が付いており、テスト返却後に記入時間をとっている。

「聖園ノートがないころは、担任が定期試験ごとに学習計画シートなどを配布して書かせていたのですが、それだと連続性がなくて。1冊に年間の記録を書き溜めていくことで成績や意欲の推移なども見えるので、教員は把握がしやすくなり、生徒も取り組みやすくなったと思います」（渡邊先生）

聖園ノートは個人面談にも活用。高校生になると使い方は各自に任せているが、「自己管理や進路実現のためにうまく使ってくれている生徒が多い」と言う。

経験の振り返りと蓄積を紡いで自分の進路を具体化する

自分の生き方や進路につながるさまざまな機会を設けている同校だが、「大事なものはやったことをそこで終わらせず、丁寧に振り返ること。そして、それを継続したり履歴に残したりして積み上げていくこと」と鴨志田先生は言う。

「進路選択って、これを経験したからこういう大学・学部を選びました、という単線のものではないと思うんです。積み上げたものがあれば、いざ進路を考えるようになったときに指針の一つになり得るだろう。そう考えて、できるだけ多様

ツール1 夏期「進路課題／進路考察」(2020年度)

ダウンロード可

自己理解：1年次のみ

【自己理解】自分自身を様々な面から、客観的に見つめよう。

～性格～

得意なこと
不得意なこと
好きなこと
嫌いなこと
長所
短所
熱中していること
好きな学問
苦手な学問
なりたい職業

～過去の振り返り～

一掃したかったこと
後悔していること
一掃しなかったこと
喜しかったこと
褒められたこと
誇りたかった職業

生き方の候補：2年次のみ

(1) 生き方の候補

進路選択にあたり、あなたの「最終的に何をしたいのか」を考えてみましょう。夢は変わる可能性もあるもの、いくつか考えて、自身の可能性を広げてみましょう。可能性を狭めないため、複数のパターン（2つ以上）を書いてみてください。すでに明確な人は、決まっているもの + その他興味のあることを、未定の方はあらゆる可能性を探って記入してみましょう。

「私」は _____ になって _____ する！

理由： _____

「私」は _____ になって _____ する！

理由： _____

「私」は _____ になって _____ する！

理由： _____

「私」は _____ になって _____ する！

理由： _____

進路実現に向け、保護者と準備：1・2年次共通

(10) 進路実現へ向け、保護者と準備

成年ではない皆さんは保護者には関係者の力の助けが不可欠、それぞれこの課題に取り組む中で話し合いの機会を持つことが、進路実現の第一歩かもしれません。進路について保護者の考えを話し合い、お互いの思いを伝え合ってください。あなたは保護者のために何をしてもらってほしいか。

【質問書】①親の思い（本人の言葉として）

②保護者の思い（本人の言葉として）

③ナビプログラムの結果や探究活動サービスの内容を参考にしてもOK。

2年次の課題は、1年次の4テーマを発展させた(1)生き方の候補、(2)卒業後に研究する学問領域の候補、(3)進学先の候補、(4)受験科目、(5)高校3年生の選択科目、(6)活用する入試制度、(7)生活・学習時間(現状)、(8)生活・学習時間(9月以降)、(9)進路実現へ向けての準備、(10)進路実現へ向け、保護者と準備、(11)オープンキャンパス 大学チェックシート、の11項目からなる。

な機会を埋め込むようにしています」(鴨志田先生)

こうして蓄積した経験や、その経験がもつ意味を進路に結び付けるステップとして重要なのが、高校1・2年次の夏休みの課題として出される「進路課題／進路考察」だ(ツール1)。1年次には、自分自身の性格や過去の経験を振り返る「自己理解」、興味のある学問・研究やその理由、それを学べる大学や受験情報を書き出す「学問・研究」、日々を振り返り、進路実現に向けて今からできること・やっておくべきことを書き出す「生活・学習面」、さらに、保護者も交えて親子で思いを綴り合う「互いの思いを確認」の4テーマ、2年次にはこれらをより具体化した項目に加え、「生き方の候補」をいくつか挙げる項目やオープンキャンパス用の大学チラシシートなどを追加。これまで積み上げてきた経験を再度振り返りつつ、これからのことを考えて自分の言葉で問いに答えていくというアウトプットを通し



聖園ノートの生徒の記入例。多くの生徒がプライベートのスケジュールも記入し、生活面・学習面の自己管理に役立っている。

て、進路に関する自分の考えや希望を具体化していく。

この課題は年々ブラッシュアップしており、当初は「自己理解」の項目はなかった。渡邊先生が1年生を担当した際に、新たに追加したという。

「上の学年を担当した先生から、自己理解がしっかりとできていないと地に足の着いた進路選びができない」と伺い、追加しました。自己理解や職業、学問分野、大学についての理解がぼんやりしたままだとい名前を進学先を選んでしまうので、そこはかなり突っ込んで書かせています。高校1年次から受験科目などを考えるのは早いように思われがちですが、受験科目を考慮せずに2年次の科目選択をしてしまうと受験校の選択肢を狭めてしまうことになりかねないので、早い段階から大学の入試情報にもアンテナを張るよう生徒には伝えています。生徒にとつてはこの課題が進路を考えるきっかけになっていると自負しています」(渡邊先生)



昨年度は3年生を対象にした大学説明会を学内で開催。「マッチングの観点でも高大連携は重要」と伊藤先生は言う。

保護者の意思・希望を確認することも重要な。課題の冊子には、保護者と生徒が進路についてのそれぞれの考えを書き込む欄を設定。そこには「人生の先輩／後輩として」という文言があり、親子が互いに対等に思いを書き綴る仕様になっている。

「本人は望んでいないのに、親は薬学部に進学させたいとか、そういうケースが毎年あるんです。意見の相違が3年次になって発覚すると進路選択は困難を極めますし、進学後のミスマッチにもつながりかねません。本課題では保護者のコメントを必ずもらい、私たちも早期に把握できるようにしています」(鴨志田先生)

一人ひとりを大切に、最後まで生徒の第一志望を応援する

2年次後半になると、いよいよ志望校を決めるステージになる。昨年度はコロナ禍の影響でオープンキャンパスに参加できなかった生徒が多かったこともあり、新たに学問別の大学説明会(1・2年生対象)や個別の大学による説明会(3年生対象)を学内で開催した。生徒が直接話を聞く機会を大事にしたいという思いからだ。

「私たち教員は、一人ひとりを大切に、生徒の第一志望を応援する」というスタンスを貫いており、情報提供やアドバイスはしても、成績によつて進路を押し付けるようなことはしていません。だからこそ、生徒が自分でやりたいことや行きたい大学を見つげられるよう、できる限りのサポートをしたいと考えています」(伊藤先生)

成果と課題

周囲に流されない主体的で自分らしい進路を選択・実現

自己理解、社会・職業理解、学問・大学理解と、中学時代からステップを踏んできた生徒たちは、「大学に行く意味や大学で何を学ぶのかということへの意識が概して高い」という。

「みんなが行くからなんとなく自分も大学に行く、偏差値で進学先を決めるという生徒はいませんし、成績がかなり優秀でもなりたい職業があるからと専門学校へ進学した生徒もいます。そういう意味では、自分軸や主体性が養われていると感じます」(伊藤先生)

一方で、課題もある。進路指導部が6年間のストーリーを決めて一貫した進路教育を行っているが、「プログラム単位で見ると学年の間の連続性が希薄なケースもあると感じる」と渡邊先生。「中1から高2までを紐づけ、最終的な進路選択にもつながっていくような流れを作つていきたい」と考えている。

最後に、大学入試が変わりつつあることを受け、伊藤先生はこう期待を語った。「今後は高校での探究の成果を活用するようなタイプの入試も増えていくと思うので、6年間の取組や活動の成果もとに自分が興味のある分野に進学する生徒が増えてくることを楽しみにしています」(伊藤先生)